

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 2 5 年 5 月 2 9 日現在

機関番号：17701

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2011 ～ 2012

課題番号：23593141

研究課題名（和文） 長崎原爆投下時における看護職者の災害復興活動に関する研究

研究課題名（英文） Study on the nurse's relief activity at Nagasaki atomic bombing

研究代表者

松成 裕子（MATSUNARI YUKO）

鹿児島大学・医学部・教授

研究者番号：00305848

研究成果の概要（和文）：この研究は、被爆者に対する看護という誰もが経験し得ない事を対象としている。被爆当時の看護職者に、救護活動の体験を語ってもらい、証言をDVDとして保存し、被爆地長崎における戦後復興期の看護活動をまとめた。証言内容を記述化し、分析することで、復興期の看護活動の体系化を図り、災害看護の構築を目的とした。このように看護職の知識と経験をまとめることは、新たな看護の視点や復興支援活動の指針の発見にも繋がり、意義があった。また、国際学会での発表、原著論文としても公表することができた。

研究成果の概要（英文）：

Purpose: To clarify the situation with respect to nursing care conducted immediately before and after the atomic bombing of Nagasaki in 1945.

Method: Five surviving nurses, who were registered nursing staff in Nagasaki at the time of the bombing, volunteered to participate in this research. Individual interviews were conducted in order to obtain information concerning the nursing activities in affected areas. The collected information was compared with official documents regarding the atomic bombing of Nagasaki as well as the findings of current studies on nursing in disaster situations.

Finding: The five participants clearly indicated that, starting the day of the bombing, nursing care activities changed from moment to moment according to the condition of radiation victims, the condition of affected areas, and the relief systems in place. Under these conditions, nurses attempted to provide nursing care to victims of the bombing through any means possible.

Conclusion: The participants in the present study communicated a single message: that nursing care must be flexible in critical situations. Triage and cooperation with other types of medical professionals were also identified as important factors in nursing care.

Ethical consideration: Prior to data collection, approval was obtained from the Institutional Review Board of Nagasaki University, Nagasaki, Japan.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・基礎看護学

キーワード：災害看護，原爆

1. 研究開始当初の背景

長崎、広島は被爆都市としての歴史的経緯¹⁾がある。特に長崎大学においては、21世紀における核エネルギー利用に伴う放射線

被ばくの諸問題に対処し、世界平和の達成に貢献する基本理念の実現を目指している。また、文部科学省 COE プログラムにも採択され、放射線の人体影響、特に低線量影響研究

と発癌機構研究の世界的拠点大学として欧米・旧ソ連邦の主要16放射線研究機構・大学と国際コンソーシアムを形成し、各種プロジェクトを推進している。また政府 ODA による JICA 事業、文部科学省セミパラチンスク疫学調査、WHO 緊急被ばく医療機構の指定センター、アルベルト・シュバイツァー世界医学センター等も設置されていることから、海外からも研修等の要望が絶たず、被爆地長崎を訪れる人々は世界各国から限らない。

このような被爆地長崎における第2次世界大戦前後の看護の変遷¹⁾を明らかにすることは、被爆者に対する看護という誰もが経験し得ない体験を研究対象としているだけに、世界的に歴史的価値のあることである。そして、このような復興期の看護活動をまとめることは、世紀を越えた最大の災害看護の体系化を明らかにすることになる。そして、現在でも世界各地における地域紛争による被災地域での、人道支援、さらに自然災害による被災地域では、災害で傷ついた人々の健康を守るために、世界中で看護職が活躍し、復興支援の活動を行っている。このようなことから原爆投下後の復興期の看護活動がどのようなもので、どのようにシステム化されていたのか明確化することは、これらの教訓として活かされると考える。また、このような看護職の方々の知識と経験をまとめることは、新たな看護の視点や復興支援活動の指針の発見にも繋がり、意義のあるものと確信している。

既に研究代表者は被爆地広島における災害復興時の看護活動については報告書²⁾、並びに2つの原著論文³⁾⁴⁾を海外にも発信している。また、平成22年9月には分担者は、セミパラチンスク地域の調査経験がある。これらを基にし、今回の研究の充実を図って行きたい。これらは今後、看護研究者により、さらに研究が進められ、学問的構築に繋がる価値ある研究となるものと考えられる。

特にこの研究の特色・意義については、1)被爆者に対する看護という誰もが経験し得ない体験を研究対象としている。世界に被爆の実態を発信することは、被爆国日本における看護者の責務である。

2)被爆当時の看護職者の体験記録を後世に残すことのできるの、今を持って以外、不可能なことである。現在、取り掛からなければ、経験を語ってくれる先輩諸姉を失い、時間的に猶予はない。

3)被爆地長崎における戦後復興期の看護活動をまとめることは、国際的にもかなり価値

が高いことである。このことは広島における同様の研究を実施した際に、多くの国々の方に支援を頂き、賞賛を受けた。

4)直接ケアにあたった看護師諸姉の手記や看護活動を調査した研究は存在しているが、復興期の看護活動・システムに焦点をあてたものはない。

5)戦後復興期を支えた看護職者の経験知を体系化することで、新たな看護の視点や復興支援の活動を見つけ出すことができる。また、今後の看護研究者により研究が進められるための一次的資料となり、さらには学問的構築に繋がる価値ある研究となるものと考えられる。

6)世界中における看護教育の面でも、災害看護を考えていく上での教材や調査資料としての価値がある。

以上ととらえている。

2. 研究の目的

被爆地長崎における戦後復興支援の看護活動について、被爆当時の看護職者の体験を語ってもらい、インタビューする。その証言をDVDとして保存する。証言内容を記述化し、分析することによって、復興期の看護活動の体系化を図り、災害看護の構築を目指している。

3. 研究の方法

研究は、以下の2段階である。

1段階：インタビュー調査に向けた文献・資料調査を実施し、その結果から、調査の具体的な方法等の検討を行い、文献収集による不明な点、明らかに出来ていない点等の明確化を図る。

2段階：対象者へのインタビュー調査の実施。インタビュー調査分析結果から、資料作成検討をする。次に、作成した資料の再検討を行い、その後、パンフレット・DVD等に作成する。

各詳細な方法を記述する。

第1段階は、文献・資料(一次資料)調査を実施する。この文献・資料調査の内容：1)被爆直前の長崎地域における医療体制の実態、2)被爆直後の長崎地域における医療救援活動の組織、救援体制、地域ごとの活動、看護に従事した人の証言

3)戦後復興期の長崎地域における医療救援活動 被爆者医療を中心に期間を区切り、特に救援と看護活動に焦点を当て、文献・資料調査を行う。特に長崎県や長崎市、周辺市町村など発行の県史・市史、戦災史、郷土史、

あるいは主要医療機関発行のさまざまな資料等を対象とする。そして、どのような看護活動がなされ、どのような看護ケアや活動が記述されているか、これらを収集することを1つの目的とする。4)そして、調査を進めていくにあたり、不十分となる点については、インタビュー調査において詳細に聞き取り、明らかし、根拠を明確にする。

第2段階は、インタビュー調査を実施する。インタビュー調査の内容：1)インタビューとしては、先に原著論文として公表した長崎地域での看護活動に従事した人1名の方のインタビューを行う、その際の聞き取り項目は第1段階から抽出されたものとする。

次に、証言内容を分析し、調査項目の不足、修正やインタビュー方法の改善等について検討する。引き続き、4名の被験者へのインタビュー調査を実施し、インタビュー調査分析を完了する。インタビュー調査では、広島における研究での調査票を用い、半構造化面接法にて行う。

これらの看護職者の経験についての証言を一次資料として、DVDの形で残す。次に、証言内容を記述化し、可能な限り、詳細、かつ正確に記録する。

分析方法は、エスノグラフィーのデータ分析手順に基づき実施する。これらの調査結果から、「被爆地長崎の戦後復興期における看護活動」の実態を正確に把握し、不明となっているところや明らかにしなければならないところの検討を行う。必要に応じ、再度聞き取り調査を行う。

この二次資料の中から、新たな看護の視点を見つけ出し、被爆地の看護の概念を構築する。

これらの証言を資料としてまとめ、論文とする。

録画されたものをパンフレット・DVD等にし、使用可能とする。

さらにこれらのパンフレット・DVD等を外国語訳し、世界に向けて発信する。

4. 研究成果

当該研究の課題としては、以下のことを実施し、成果が得られた。

まず、看護職者の経験についての証言を一次資料としての形で残した。証言内容は、記述化し、可能な限り、詳細、かつ正確に記録した。それらをエスノグラフィーのデータ分析手順に基づき分析を行った。このようにして「長崎の原爆被災復興における看護活動」について、文献、証言から実態を把握し、年度の報告とした。次に看護職者の証言を資料としてまとめ、論文とした。そして、平成24

年4月には、災害・救急医学の専門誌「Prehospital and Disaster Medicine」へ、テーマ「Individual testimonies of nursing care after the atomic bombing of Nagasaki in 1945」として投稿し、平成24年7月には受理された。

そして、これらの研究成果の国際学会は、平成24年6月30日から7月1日までの2日間、神戸ポートピアホテルで開催されたThe Global Network of WHO Collaborating Centers for Nursing and Midwifery第9回国際学会にて、テーマ「Individual Testimonies of Nursing Care after the Atomic Bombing of Nagasaki in 1945」として、発表した。

また、看護職者の証言を録画したものをDVDとした。さらにこれらのDVDについては、英語版として翻訳し、完成した。

また、得られた成果は、協力機関、関係機関へ資料として、公表原稿を印刷し、配布した。

本文中の引用文献：

1) ISDA JNPC 編集出版委員会：被爆の実相と被爆者の実情1977NGO被爆問題シンポジウム報告書．朝日イブニングニュース社，1978．

2) 松成裕子，野澤幸江，大原与志子，他11：被爆直後の看護活動について 証言のDVD保存による教材の開発の試み，木村看護教育振興財団看護研究集録，13巻，55-66，2006．

3) Matsunari Yuko，Nozawa Sachie.，Sakata Kayo.，Ohara Yoshiko.，Kobayashi Toshio.，Ohara Ryoko.，Kawano Noriyuki：Nursing Care Activity After the Atomic Bombing of Hiroshima and the Development of a DVD for Teaching Material, Journal of Medical Safety No.1：p26-p35, 2008、

4) Matsunari Yuko，Nozawa Sachie.，Sakata Kayo.，et al., Individual testimonies to nursing care after the atomic bombing of Hiroshima in 1945, International Nursing Review, 55, 1, p13-p19, 2008

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

{ 雑誌論文 } (計1件)

Yuko Matsunari, Ruiko Nakao: Individual testimonies to nursing care after the atomic bombing of Nagasaki in 1945 Prehospital and Disaster Medicine, 査読有 2013;28(2): 99-103

DOI:

<http://dx.doi.org/10.1017/S1049023X1200177X> (About DOI), Published online: 21 December 2012

〔学会発表〕(計1件)

Yuko Matsunari, Nawo Yoshimoto, Rika

Yatsushiro: Individual testimonies to nursing care after the atomic bombing of Nagasaki in 1945. The 9th International Conference with the Global Network of WHO Collaborating Centers for Nursing and Midwifery, Kobe, 2012.6.30-7.1

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松成裕子 (MATSUNARI YUKO)

鹿児島大学・医学部・教授

研究者番号：00305848

(2) 研究分担者

八代利香 (YATSUSHIRO RIKA)

鹿児島大学・医学部・教授

研究者番号：50305851

研究分担者

吉本なを (YOSHIMOTO NAWO)

鹿児島大学・医学部・助教

研究者番号：90452937